

ポケモン×ヒロアカ短編集

烏賊焼き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ポケットモンスター」と「僕のヒーローアカデミア」の短編集です。ピクシブ様とのマルチで投稿しています。

またこちらの小説は私が書いた旧作のようなものです

<https://syosetu.org/novel/1863>

目次

きょうあくポケモン	1
きつねポケモン	6
こおりがポケモン	10
ぬけがらポケモン	14
くわがたポケモン	18
ぼうくんポケモン	24
ヒアリングポケモン	28
ゆきぐにポケモン	30

きょうあくポケモン

入学試験の時期というのはどこの学校も忙しくなるものだ。大量の受験生を受け入れるための準備に始まり、試験問題に不備ないかの確認及び試験中の監督、それが終わっても大量の解答用紙のミスでない採点地獄が待っている。国内でも指折りの教育機関としてその名を轟かせる雄英高校においても死ぬほど忙しくなる時期である。

そんなものはや首が回らなくなるほど忙しい時期に、ヒーロー科の教員全てを集めた職員会議を開くなんてことは本来ありえない事だった。

「みんな集まったようだから始めるよ。この会議の議題には例の受験生―鯉谷君を入学させるかどうかさ。」

根津は一同を見回した後、手元の資料に目を落とす。資料からは人格的な問題も見られないし、筆記試験の成績も雄英に入学するには申し分ない。クラスを引っ張るような存在でこそなかったものの、常に誰かから必要とされる人間であったようだ。ここまでなら職員会議なんて開く必要はなかったのだが、問題は実技試験だった。

「それでは実技試験中彼女を追っていたカメラの映像を流します。」
セメントスの合図で映像が流され始め、一同は画面に目を向けた。

「大失敗しちゃったなあ…。」

そんな会議が開かれたとは露知らず、件の人物である鯉谷龍歌こいたにりゆうかは家の近くにあるそこそこ大きな滝に来ていた。大きいとは言ってもわざわざ見に来るほどかと言われると首を横に振る程度の規模で、ここへ来るための道も何年前前に一度だけ整備されたような荒れ具合。それらの条件が重なりよほどの物好き以外は立ち寄りたくないこの滝は、彼を水浴びさせてあげるには絶好の場所になっていた。

「ギャーオー!!!」

「あなたはだいたいぶご機嫌ねえ…はあ…。」

久々に来られて嬉しそうな彼とはまるで反対に、私の気分は最低値を更新し続けていた。まるで鉛でも飲み込んだように息苦しい。ふと自分の指先を見ると、笑ってしまうほど真っ白になっていた。

「そういえばギャラドスって凶鑑でもやたら町破壊してたっけ…」
ポケモン凶鑑のテキストを話半分でとらえていた私は、ゲーム画面越しに起こっているポケモン同士の技のぶつけ合いが現実になっただけで、そんなことを考えていなかった。

〇〇の　じしん！　こうかは　ばつぐんだ！　△△は　たおれた！

そんな風に終わったりしないのだと嫌というほど理解させられた。『相手がはがねっぽいからとりあえず　“じしん”を』だなんて軽々しく“わざをせんたく”した私が次に見たのは、“地震”によって完全倒壊した建物の数々だった。その光景を見た私の冷静な部分が語り掛ける。『忘れてたの？このポケモンを怒らせた結果、地図から一つの町が消えたこと。』高揚していた気分が急速に冷めていく。周りを見ると他の受験氏が怯え切った目で私を見ている。その目が如実に語っていた。

―バケモノ―

そのときの背筋が凍り付く感覚は、たぶん一生忘れられない気がする。そこからはよく覚えていない。気が付いたらこのいつもの滝にきていて、いつものように彼が遊んでいた。

「あー、これからどうしようかなー…。」

河原の平らな岩の上で寝転がりながら考える。正直言つて雄英に入ることにして特に心配はしてなかったのだ。座学の成績は問題なかったし実際手ごたえも十分あった。そして彼を信頼していたからこそ実技試験も大丈夫と高を括っていたのだ。だって彼は強いから。

「まあ現実には市街地を壊滅させただけなんですけどね…。」

自分の言葉に自分で泣きそうになる。ホント何しに行ったんだ私。あれじゃ落としてくださいと言っているようなものだ。私が学校の立場だったら即お祈りメールの文書を作成している。後悔してもし

きれないとはこのことだろう。頭の中でグルグルと嫌な考えが止まらない。

「…もういいの？」

「…ギューン…」

ふと気が付くと彼は泳ぐのをやめてじつとこちらを見つめていた。しばらくそうして見つめあっていると、彼は私の手が届かないくらいのところまで近寄ってきた。唸るような声と共に顔が近づき瞳を覗き込まれる。コイキングだったころの間抜けな黒い瞳はそこにはなく、代わりにあるのは真つ赤な大きい瞳。そんな彼の瞳の中には今にも泣きだしそうな自分の顔が映りこんでいた。

「…ごめんね…私がつとちゃんと考えてれば…：うう…あ、っ！」

私の謝罪を遮るようにべろりと顔を一舐めされた。突然のことにぽかんとしている私にフンと大きく鼻を鳴らした彼はまた泳ぎ始める。深く潜ったり顔を出したり、ときどき大きく飛び上がった。彼の動作に合わせるように揺らぐ水面や飛び出るしぶきが夕日が反射してキラキラ光っていた。

「…はは、励まされちゃったよ。」

気が付くと頬に涙が伝っていた。この世に生を受けてからずっと一緒にいた彼を、こんなにも優しい彼をバケモノ呼ばわりさせたことが、悔しい。いろんな感情がごちゃ混ぜになって、胸がズキズキ痛む。(ダメ、せつかく励ましてくれたのに…)

気が付くと涙は大粒になっていて、こらえきれない嗚咽が溢れた。励まして泣かれるとは思っていなかったのか、彼が慌てて近づく水音が聞こえる。

「ごめん…少しだけ…泣かせて…：。」

すぐ近くに来た彼に触れる。魚類特有の冷たい鱗に体を預けて、私は大声を上げて泣いた。泣いて、泣いて。ようやく泣き終わったところには、日は沈みかけだった。その間黙って私の涙を受け入れてくれた彼を見ると、赤い瞳には不安が揺れていた。

「…ごめんね、もう大丈夫。ありがとう。」

そういいながら彼の頭を撫でると、彼は安心したように一鳴きして

私の右手の甲に半ば埋まっているボールに収まる。昔からボールの中に彼の存在を感じるこの感覚が好きだった。私はボールを一撫ですると家へと足を向ける。

その途中で、彼に私の決意を話すことにした。

「私決めたよ。あなたとの約束、絶対に果たす。」

「……」

彼がまだコイキングだった頃にした、他愛もない約束。大きくなったら一緒にいろんなところに行こう。いろんな景色を見て、いろんな人に出会って、いろんな話を聞いて、そして、いろんな思い出を作ろう。

「そのためには、あなたを人前に出しても大丈夫なようにしないとね。」

ヒーロー免許と呼ばれる免許がある。これは普段法律で禁止された公の場における個性の使用を認めるものだ。これを手に入れるために受けた雄英だったが落ちたならしょうがない。やるべきことはいつまでも足踏みすることではなく、少しでもいいから前に進むことだ。

「また、頑張らなきゃね?」

「……♪」

ボールの中にいる彼が、優しく笑っている気がした。

その後異例の41人目の合格者になったという知らせが届くのは
また別の話。

きつねポケモン

あいつが亡くなったという知らせを聞いたのは、あいつが大好きだった雲一つない快晴の日だった。

「とうとうお前まで向こうに行きやがったか…。」

年を取ってからただでさえ重い体が更に重くなったように感じる。目を閉じるとあいつと志村が見えた。すがすがしいほどの笑顔のあいつらが。

「…つたく。年を取るとすぐこれだからいけねえ…。」

そう愚痴をこぼして、好物のたい焼きを温める。

『お前が食ってるのを見るとたい焼きが死ぬほどうまそうに見えるんだよなあ…。…俺にも一つ…つてそんな怖い顔すんなよお！俺が悪かったから！助けてくれ相棒！』

『……コン。』

『相棒!』

こぼれそうになった涙を拭きたい焼きを頬張る。昔よりだいぶ食べる量も減り、食べるのに時間がかかるようになった。こう思うとずいぶんジジイになったもんだと笑ってしまう。ノロノロと支度を終えてから、俺は事務所を後にした。

会場に着くと、そこにはたくさんさんのヒーローや警察たちがいた。どいつの顔も笑顔だった。あいつの教えを守っていたいい笑顔。

『俺が来たからには曇り顔は無しだぜ！にほんばれヒーローナイン テールスのお通りだあ！行くぜ相棒！』

『コーン!!!』

あいつは溢れんばかりの元気と共に相棒の狐と駆け回っていた男で、数多くの人々の曇り顔を快晴のよな笑顔に変えてきた男で、誰よりも笑顔を愛した男だ。そんな男の葬式に、涙の雨は似合わない。現に会場を間違えたかと入りなおしている奴らの姿がちらほら見える

ほど、会場には曇り顔一つなかった。そんな会場の中に、見知った上方の男を見かけた。

「なんだお前も来てたのか俊典！」

「！グラントリノ！」

俊典の周りにいたヒーローたちに一言断つてから俊典と談笑をする。

「彼にはいい笑顔を教わりましたからね。」

「お前はあいつに随分気に入られてたからな。」

『おうおう俊典！ナンバーワンヒーロー就任おめでとさん！あのインタビュ、いい笑顔だったぜ！なあ相棒！』

『コンコン♪』

俊典以外でも会場にいる知り合いに話しかけるたびに、あいつの思い出が蘇る。そして笑顔になってしまふ。死んでおとなしくなるかと思えば、人を笑顔にすることに関しては何しろ生前より張り切っている気がしてくる。

そうして底抜けに明るい葬式はつつがなく進行し、皆笑顔になって帰路に就いた。

「…よお。お前さんは元気そうで安心したよ。…ところでお前さんは何してるんだ…？」

「…んーん。」

葬式の後しばらくたって訪れたあいつの墓。そこにはあいつの相棒がまるで墓を守るかのように寝そべっていた。頭をなでてやると嬉しそうに目を細めるそいつとしばらく戯れてから。そいつはまるで話を切り出すように何かをこちらに寄越した。

「手紙…。俺宛にかい？」

「キュン。」

そうだというように一鳴きするそいつから手元の手紙に視線を移す。封筒の様子からして書かれてからまだそれほど歳月がたつてな

いようだった。セロハンテープで雑に止められた封がいかにもあいつらしい。一応そいつに断りを入れてから封を開けると、学生の頃から変わらない下手だが読みにくくはない文字が並んでいた。

『親愛なる大親友 グラントリノこと西野空彦へ。』

お前の顔を見ると笑顔にすくなくって話が進まないだろうからこうして手紙に残すことにした。早速だが、俺はもうすぐ大往生するぞうだ。寄る年波には敵わねえと思っていたが、とうとう俺の命までもっていくつもりらしい。後悔はないと言えば嘘になっちゃう。でも、我ながら思い返せば返すほど笑顔になれるいい人生だった。しかし、心残りが一つあるんだ。

俺の相棒なんだがよ、種族的に千年生きるらしいんだ。律儀なやつだから俺の墓でも守ってるんだろう？そんな場所で相棒に何百年も過ごしてほしくねえが、こいつのことだ。意地でもそこに居座るつもりだろう。だからさ、時々でいいから俺の墓に来て、暇つぶしの相手をしてやってくれねえか？散歩のついでとか、暇なときとかでいい。

そして、これは本当にできたらでいいんだが、その役目を誰かに引き継いでくれ。そんなもの年寄りに頼むなっていう気持ちは俺も同じ年の年寄りだからわかる。でもどうか、どうか大親友の頼みとして引き受けてくれ。文句はあの世で散々聞いてやるからよ。

病室より友情を込めて ナインテールスより。

追伸 最後にもう一回だけ、ただの狐火快晴としてお前と酌み交わしたかったぜ。』

「…あの野郎。自分の書きたいことしか書いてねえじゃねえか…。」
実にあいつらしい手紙に笑みがこぼれる。墓におとなしく収まっているかと思いきや、死んでも人を笑わせに来やがって。

「……ん……？」

「はは。他ならぬ大親友様の頼みだ、応えてやらないとな。」
小首をかしげたそいつを一撫でして、隣に腰を落とす。どうせ暇なんだ。こうしてゆっくり一日を過ごすこともまた、悪くはない。

(今度は油揚げでも持ってきてやるか…。)

雲一つない快晴の空が、一人と一匹を見守ってくれている気がし

た。

こおりがポケモン

「…拳藤さん、ちょっと相談したいことがあるんだけど、いいかな？」

彼女が声をかけてきたのは、始業前の教室でだった。こんなところでしてくる相談事ならそんなに大したことでもないんだろうな、とその時の私は思っていた。

「いいよ。どうしたの？」

「ありがと。こどもが出来ちゃったんだけどどうしたらいいかな？」

「……………？はい？」

教室の空気が凍り付いた。先ほどまでやれ昨日のテレビがだのやれ課題がきつかっただの皆思い思いに話していた朝の談笑会が一転、誰もが彼女を見つめて固まっている。

待て、落ち着け拳藤一佳。今一度落ち着いて今の状況を確認しろ。相手は冬風氷蛾^{ふゆかぜひょうが}。ヒーロー科異例の41人目の合格者として入学した少女。雪みみたいな銀髪に氷みみたいな青い瞳の真面目な子。唯とか霊子みたいなおとなしい子と一緒にいるのをよく見る。個性はモンスターボールで右の手の甲に埋まったボールからモンスターを出す。出てくるモンスターはモスノウという種族らしい。雪属性の蛾といった感じで羽ばたきであらゆるものを氷漬けにしてくる敵に回したら厄介極まりない奴。今日は珍しくボールの中にしまえばなしのようだ。そして相談内容が――

「こどもっ！」

「こども。」

「こども……………」

――こども。いや、こどもが出来ちゃったって。え？なんで？え？しちゃったの？本当に？

「てことは、その、こどもができるようなことしちゃったの？」

「オスとメスが一緒に過ごしたのは間違いない。」

「そ、そうなんだ…。」

「うん。実際にできてるから。」

言い方。その言い方はちよつと、その、酷過ぎるんじゃない？ちよつと後ろ振り返って見てみなよ。その発言のせいで茨がかわいそうなくらい真っ赤になってるよ？ちよつと登校してきた唯がUターンして教室から出て行っちゃったよ？

「え？相手とかわかる？」

「わからない。」

「わからない!?なんでよ!？」

「だってできるわけないと思ってたから。」

「ええー……。」

ぐくりと生唾を飲み込む音が聞こえた。気持ちはわかるけど今は止めてよ。今唾を飲んだ人が清楚な人が裏で実はってパターンがいはわかったけど止めてよ。私までこの子が、その、乱れるところを想像しちゃうから止めてよ。…茨大丈夫？インフルエンザもかくやっつけてくらいに顔赤いよ？保健室に避難しに行った方がいいんじゃない？

「…えーつと、やっぱりそういう病院に行った方がいいと思う。」

「そっか。ありがと。」

「あ、うん。」

彼女がこちらに笑みを浮かべて感謝を述べた後、何事もなかったかのように席に着いた。それと同時に予鈴が鳴り、皆が慌てたように席に着く。そうして始まった一日は、皆が皆平静ではいらなかった。皆どうしても彼女のことを気になって授業中上の空気味になり、先生から当てられても気づかないことが数多くあった。そのことを他の先生方から聞いた我らが担任ブラド先生に軽くお叱りを受けた。皆がいつも以上に疲れた顔をしていた。そんな放課後、私は彼女に声を掛けた。

「冬風さん、ちよつといいかな？」

「？ うん。」

「二人でそういう病院行くのってやっぱ怖かったりするからさ、私も一緒に行つていいかな？」

「いいの?」

「うん!」

「ありがとう!」

私も女だからそういうのはわかる。こういう時には誰かが隣にいてくれたらすごく心強いものだ。心なしか彼女のへその少し下あたりを見ている気がするクラスメイトたちから離れ学校を出る。そのまますすぐ駅に向かい、病院に行く前に一度家に寄りたいたいという彼女に合わせて彼女の家に足を向けた。電車の中では特に話すことはなく、沈黙が広がるのは私にとっては凄く気まずかった。

「ただいま。お留守番ありがとうね。」

「あいすす♪」

彼女の家に着くと彼女の相棒が出迎えてくれた。珍しくボールの外に出していないと思つたらそもそも連れてきていなかっただけ。帰ってきてくれた彼女に嬉しそうにすり寄っているその姿がなんともかわいらしいが、氷細工のような氷点下180度の羽が近くで動くたびに、夏が近づいて熱くなっていた気温が急激に下がっていく気がした。

「具合はどうだった?」

「ふんわ〜?」

「そっか。」

そうして一人と一匹は玄関でしばらく戯れたあと、彼女が家の中に入っていったので、玄関には待つように言われた私と彼女の相棒が残された。彼女とそっくりな青い瞳としばらく見つめあっていると向こうからこちらに近づいてきた。頭を優しくなでてみる。気持ちよさそうに細められた目にこちらも笑顔になつてしまった。

「お待たせ。」

「別にそんな待つてな……………、なにそれ?」

「何って、こども。朝話したよね?」

しばらくして現れた彼女の手に抱えられていたのは、卵だった。見たことのないくらい大きな卵。彼女の相棒がその卵に慈愛に溢れた目を向けているのを見て、私は自分を含めたクラス全員がしていた勘

違いに気づき、思わずため息が出た。自分でもびっくりするような深いため息だった。現に彼女はちよつと引いている。誰のせいだと怒るのも馬鹿らしいくらいどうでもよくなった。

「……えつと……。」

「私たちが勝手に勘違いしたのは私たちが悪い。それはそうだけどさあ……。」

「……あの……。」

「あなたの言い方にもいろいろ問題はあったと思うんだ。それなら病院なんか行かなくていいよもう。」

「え？いいの？」

「うん。明日ブラド先生に相談するぐらいでいいと思う。」

「そう？」

「そう。」

釈然としない様子の彼女に一声かけて、写真を一枚撮らせてもらう。卵を抱えた彼女と、彼女の相棒の写真だ。

『今日B組をお騒がせした親子の写真です。』

そんな言葉と共にクラスの連絡用グループに張り付ける。すると途端にスマホがうるさくなったのでカバンにしまう。どうしたのかと聞く彼女にあとでクラスのグループを見るように伝えてから二人で彼女の家を出る。明日のことについて彼女と話しながら駅まで送ってもらって帰路に就いた。家に着いたときはもうくたくたで、心配してくれる両親に大丈夫と返して夕飯やシャワーを済ませベッドに入った。

「……………」

ベッドの中で再びアプリを立ち上げて写真を見る。我ながら悪くない出来だと笑みをこぼし、そのまま眠りについた。

ぬけがらポケモン

「怪談をしましょう。」

彼女―蟬殻空せみからうつろは昼休みに入った途端クラスにそう呼びかけた。確かに春から夏に移り変わったあたりで、だんだんと気温も高くなつて来ている。季節的には申し分ないのかもしれないが…。

「昼間から?」

「はい。」

「教室で?」

「はい。」

「……それって怖いのか?」

「さあ…?」

話してみないとわかりません。そういつてくすくす笑う彼女に、爆豪が付き合つてられないとばかりに大きく舌打ちをした。そのまま教室を出ていく彼をはじめとして、そもそも怪談の類が苦手だったり食欲を満たす方を優先させたり、皆それぞれの理由で教室から出ていく。しばらくして教室に残っていたのは、飯田、緑谷、麗日、葉隠、蛙吸と彼女の6名のみになった。

「それでは少しでも雰囲気づくりをしましょうか。」

そういうと彼女は自らの個性を発動させた。パアンというとぼけた音と共に彼女の相棒が現れる。例えるならばセミの抜け殻が一番わかりやすいだろうか。背中には中身が出て行ったかのような大きな穴が開いており、ちょうど瞳の所にある二つの交わった割れ目が瞳孔のようになっていいる。ピクリとも動かない空っぽの身体をふよふよと漂わせている。

おにびをお願い。彼女の指示に合わせてそれが作った奇妙な炎で、カーテンを閉め暗くなった教室内に奇妙な色の明かりが満ちる。新月の夜のような黒髪と紫色の瞳がその炎に照らされる。雰囲気作りはぼつちりだった。それに満足したのか、相棒を一撫でして彼女は口を開いた。

「今回私がお話しするのは私の前世の世界における話です。事実し

か話しませんからよく聞いておいてください。」

それを聞いた5人は一安心する。彼女には悪いが、彼女の前世とやらを信じている人はクラスに誰一人としていなかった。あの常闇ですら将来苦勞するから止めておけだなんて言っていたくらいである。それでも彼女は止めようとはせず、本当のことを言っているだけなのに、と悲しげな顔をするばかりであった。その前世とやらの話ならばそんなに怖い思いもするまい。そもそも創作だとわかりきっている怪談を怖がるほど怪談が苦手というわけでもないのだから。そんな5人の心中を知ってか知らずか、彼女はそれを語りだした。

フワライドという生き物がいるんです。紫色の風船のような姿をしていて、黄昏時にどこかへ飛んでいくことで有名な生き物。：どこかって？さあ：？探知機器をつけた状態で飛ばしてみてもいつの間にかいなくなっているような生き物ですから。私が知る限りの最有力説は所謂あの世。現世からは絶対に干渉できない死んだ者たちの世界ですね。そこに飛んでいつているらしいですよ？このことからその生き物は半分幽霊のようなものだと考えられています。

さて、そんなフワライドにまつわる話ですが、今は地図にも残っていないようなとある小さな村に起こったある悲劇についての話です。その村はフワライドの群生地近くに存在しています、たくさんのフワライドが飛び立つ光景が毎日のように見られたそうです。

そんな村である日、おかしなことが起こりました。いつも黄昏時、フワライドの大群を見て笑っている子供たちの声が、全く聞こえなかったのです。それに気づいた大人たちは慌てて様子を見に行きました。するとそこにあったのは、一人の少年がもがくように地面を這っていた姿でした。彼は先日足を怪我していて、歩けない状態だったそうです。大人たちは彼を取り押さえ、そんな状態でどこに行こうというのかと聞きました。彼は答えました。

「僕だけおいてかれちゃった。」

そう言って話を終わらせた彼女に、一同は少し渋い顔である。

「あまり怖くなかったかしら？」

「いや、怖くなかったっていうか…。」

「子供たちがいきなり消えてしまうのは怖い話ではあるんだが…。」

「それはその生き物の習性みたいなものなんじゃないかなあ？」

「うんうん。」

「この世界にそんな生き物いないのをわかりきってるから—」

—あんまり怖くなかったわ。そう答えた蛙吹に彼女は気を悪くした様子もなくくすくすと笑う。

「ですが思ったよりたくさんの人に聞いていただけました。」

「たんさん…?」

「ええ。怪談をすると霊が寄ってくるというのは本当だったみたいです。」

すっかり雰囲気をつくった甲斐がありました。そう言って笑みを浮かべている彼女とは裏腹に5人はサーツと青ざめる。いま彼女はなんと言った？霊が集まるって？今ここにも霊が集まっているのか？だとしたら—

「れ、霊を集めることが目的だったというのかね？な、なぜ？」

「この子もまた、そういうった幽霊的な生物でしてね？この子の主食は魂。背中の穴から吸い込んで食べるんです。」

ですが生きてる人間から魂を頂くわけにはいきません。そんなことしたら人間は死んでしまいますから。でもこの子もお腹はすきません。我慢させ続けるのもよろしくない。…ならどうするかって？それはもちろん死んだ人間の魂を頂くんですよ。ですから、肉体を失っても未練がましくこの世をさまよっている霊の皆さんに集まってもらったんですよ。ほら—

—こんなにおいしそう…♪

その瞬間、彼らは見た気がした。抜け殻の背中の穴から、黒い何かが見えているだけで背筋が凍るような何かが飛び出しているのを。

「この子も完食したようですし、私たちも昼食にしましょう。」

先ほどまでとは打って変わった明るい様子で食堂へと誘う彼女へ従うように教室を出る。いつもは待ち遠しいはずのランチラツシュ

の食堂ですら、今の彼らの足取りを軽くするには至らなかつた。

そうして心なしか遅い足取りで向かう最中、麗日がこらえられなかつたかのように質問する。

「空ちゃん、さっきの本当なん？」

「？ さっきのとは？」

「いや、霊とかそういうのつて、実は空ちゃん渾身の怖い話だつたりせえへんかなつて……」

アハハ……。と半ば縋るような眼で乾いた笑いを浮かべる麗日と、せつかく怪談終わったんだから蒸し返すなという視線を麗日に向け、る四人。そんな彼女を見た彼女は、あきれたような表情で答えた。

「本当も何も——」

——私はこれから事実しか話さないと最初に言ったでしよう？

(あかん。ウチ今日眠れん。)

食堂で待っていたクラスメイト達が予想以上に恐ろしい体験をしたらしいを彼らを見て、彼女の怪談を聞いてみたくなるまで、後少し。

くわがたポケモン

「悪いな諸君。」

バスに駆け込もうとした生徒たちの前に颯爽とピクシーボブが降り立つ。ニヤリと笑った彼女が個性を発動すると同時に、足元の地面が大きくせり上がる。

「合宿はもう始まってる。」

生徒たちが悲鳴を上げながら崖の下へと落ちていく。……………一人を除いて。

「……稲鋏。」

「ヤツテキマツシャー!!」

「すみません先生。オオアゴ?この人たち敵じゃないから、大丈夫だから、降ろして?」

「……………」

「オオアゴ?」

そこにいたのは巨大なクワガタに掴まれ空を飛んでいる少女だった。機械のような見た目と、甲虫とはまた違う生物であることを示すような2対4本の脚。まるでレールガンのようにまっすぐ伸びた1対の大顎からは、威嚇のつもりかパチパチと電撃が飛び出している。抱えている主を守ろうと必死な様子だが、主がそれに渋い顔をしていることに気づいてすらいない。

「……ここに降りなくていい。下に降りて他のやつらと合流しろ。」

「あ、了解です。行こうオオアゴ。」

「……………」

「怒るよ?」

説教は嫌だったのだろうか。不満げにバチンツと大きく顎を鳴らした後、崖の下に降りて合流する後ろ姿を見送る。

「あれが例の子?」

「はい。」

魔獣の森に生徒たちが突入した後、宿舎へ向かいながらマンダレイと話す。稲鋏砲火^{いなくわほうか}。黄色い瞳にイナズマ型のメツシユが入った黒髪

を後ろで縛った少女。彼女は0ポイントヴィランの討伐の際に、受験会場の一角を全力の雷撃で更地にして気絶。セメントスが他の受験生を守らなかつたら怪我では済まなかつたかもしれない。異例の会議を開き決定した内容は、ヒーローとして自覚をきちんと持たせることが出来るように雄英で育てられれば、次世代の“柱”足りえるヒーローになる。ということでは何か問題を起こしたら除籍ではなく退学処分にしてもよいという条件で21人目のA組生徒として受け持った。まあ結果から言ってしまうえば彼女は除籍などありえないほど優秀だった。

「なるほどねえ…。」

そう、だった。マンダレイは事前に渡しておいた資料を見ながらため息をつく。個人面談の内容や事前に用意した彼女のデータをみればこちらが何を伝えたいのかというのわかるというもの。

「思い返せばUSJ事件からくすぶっていたのでしよう。何かあったとき自分は主をきちんと守れるのかという不安が。」

「そして期末試験でそれを爆発させちゃったんだ。」

USJ事件。大半の生徒たちにとってそこは初めてヴィランと対した場所であり、彼にとってトラウマのスイッチを入られた場所だったのだろう。それに気づかぬまま様々なイベントをこなし、期末試験で彼女というよ彼に与えられた課題。自分のせいで主が傷ついたときに落ち着いて行動できるかを見たそれは、結果から言えば失敗だった。

「試験はクリア。教員を一人倒してゲート脱出。それと引き換えに演習場の一部を更地に。その後からあのオオアゴくんが彼女を無駄に庇うようになったと…。」

「ええ。」

本来ならばこの林間合宿では個性を伸ばす限界突破の特訓を行ってもらう予定だったが、彼女に関してはそれは止めておいた方が良さそうだ。煙が上がる魔獣の森を見ながら、口からため息がこぼれた。

ところ変わって魔獣の森の中。A組のメンバーたちは絶望していた。

「昼飯抜き確定かよー!!」

「腹減ったア!!」

現在時刻12時半を少し過ぎたところ。全員の昼食抜きが確定したのだ。飯田の提案で一時休憩をとることにした一同は思い多いの恰好で休みながら喋っていた。

「オオアゴだけ昼飯とかずりイぞ！」

「くそう…! オイラも女の子の膝の上であーんとかされてみたい…!」

「そつちに嫉妬はさすがに見苦しいぞ峰田…。」

オオアゴに甲虫用のゼリーを食べさせながら、彼女はアハハと笑った。オオアゴも空腹が満たされ主に構ってもらえてご満悦の様子で、しばらくすると寝息を立て始めた。その様子にクラスメイト達が最近気になっていたことを小声で質問する。

「そういえば、最近オオアゴちゃんの様子がおかしかったわよね?」

「うんうん。戦闘訓練中もやたらスパークしてたし。」

「えーと…。」

困ったように笑う彼女に蛙吹が言う。

「迷惑だなんて思ってるわけじゃないのよ。ただ私たちが聞きたいから聞いているだけよ。」

「…うーん。話せば長くなるかもしれないけど…。」

本当に聞く? という彼女に皆がうなずきを返すと、彼女はオオアゴの頭を撫でながら語りだした。

この子が私を守ろうとするのは、この子がまだアゴジムシ…幼虫だった頃にあった出来事が原因なの。この子と一緒にいるときにヴィランに襲われたことがあって、その時私がこの子をヴィランから庇ったんだ。…あ、怪我とかはしてないよ? すぐヒーローの人に助けてもらえたから。でも、私が庇ったのは、この子からしたらすごい衝

撃だったんだと思う。だってその日を境にこの子は強さを求めるようになったから。

そうして頑張って頑張って、この子の種族的に最強の姿。成虫になった姿が、今のこの姿なんだ。この子は思った。この姿なら私を守れるって。…でもそうじゃなかった。

USJで、私たちがの脳無ってヴィランをでんじほうで狙撃したの覚えてる？そうそう。あのヴィランの超再生の個性でノーダメージで抑えられちゃったあれ。あの時の攻撃って、この子一人で行える中で最強の一撃だったんだ。私はしようがなかったって割り切れたけど、この子はそうじゃなかった。自分が出せる最強の一撃をを何もなかったみたいに扱われて、この子の自信にヒビが入っちゃったんだと思う。その小さなヒビが成長して、どうしようもない亀裂になろうとしてるんだと思う。

といっても、この子がこんなになるまで気づいてもあげられなかったんだけどね…。そう言っただけで悲しげな顔を浮かべた彼女に、場が沈黙が訪れる。

その沈黙を破ったのはあまりにも意外な人物だった。

「イヤ、ソレハソイツノ自惚レガスギルダケダロ。」

ダークシャドウ
「黒影…。」

黒影は寝ていたオオアゴを小突いて起こすと、その目を見ながら語りだす。

「オレモオマエモ誰カノ個性ダ。ソノコトハ理解シテルダロウ？」

「……。」

「ダカラハツキリ言ワセテモラオウ。オマエダケデ強クナルナンテ無理ダ。」

「……!!」

バチン！

怒りを表すようなオオアゴからの放電に黒影は話は最後まで聞けと手をひらひらとさせる。

「ダカラ共ニデ強クナレ。」

「……。」

「他ナラヌオマエラデ強ナルンダ。オレタチダツテソウシテキタ。ナア！」

「ああその通りだ。」

黒影から話を引き継いだ常闇が言う。その目には様々な感情が渦巻いていた。

「稲鍬がこいつの異変に気づけなかったのも、オオアゴが自信を失いかけているのも、原因はお互い知らず知らずのうちに見えない壁を作っていたことだろう。その壁を通して見えた相手を本当の姿だと思ひ込み、その壁を通して見える自分を強い存在だと見せかけてな。覆水盆に返らずだ。過ぎてしまったことはしようがない。ならばこれからは一人と一匹、共に歩んでいけばいい。」

— 思い返せばクワガノンに進化したその時から、お互いにどこか遠慮していた。強くなったのだからと、心のどこかに壁を作っていた。

「…ねえ。オオアゴ。」

「……。」

「——」

日がだいぶ傾きオレンジ色に染まった空の元、ようやく宿舎にたどり着いた一同がそろそろと宿舎に入っていくのを見送った後。プツシーキャッツの二人が声をかけてきた。

「残念だったね。せつかくあの子のためにいろいろ考えてたのに。」

「そうそう。あれ見て『イレイザーってちゃんと先生なんだなあ』なんて思っちゃった。」

「からかわないでください……。」

魔獣の森で何かがあつたのだろう。現れた一人と一匹の顔は、悩んでいたのが馬鹿らしくなるような良い顔だった。もう問題は解決したと見ていいだろう。ならばこちらも遠慮しなくていい。

「あの様子なら明日からの稲鍬のトレーニングは少し厳し目にして大丈夫でしょう。」

「うわぁ悪い顔…。」

「私情入ってないそれ？」

ねこねこねこ。と笑い声らしきものを上げるピクシーボブ達と共に、明日からどうしてやろうかと考えながら宿舎へと足を向けた。

ぼうくんポケモン

春。これから始まるヒーローの卵としての学生生活に胸を膨らませながら登校した私、取蔭切奈はこれまで生きてきた15年の人生の内一度も味わったこともない興奮を味わっていた。

(恐竜だああああああああああああああ!!!)

4月の学校行事と言えばだれもが思い浮かべるだろう入学式。しかしヒーロー科の生徒にはそんな時間的余裕は存在しないらしく当然のようにキャンセルされ迎えた個性把握テスト。そのさなかに目撃した一人の個性が、完全に恐竜だったからである。私が好きなものと公言している、恐竜だったからである。

大きさは全長が大体12〜3メートルといったところか。鋭い牙が生えた巨大な頭に、その体軀に見合わないほど小さな腕。太くてたくましい尻尾とそんな体を支えるべく発達した両足。簡単にイメージとして伝えるならティラノサウルスと言ったら大体伝わるだろう。王冠のようなトサカが生えていることや首周りにある羽毛のようなものなど多少の差異は見受けられるが、100人が100人これを見たらティラノサウルスという言葉が頭をよぎる、まさに恐竜の王としての威風堂々とした姿だった。

(絶対に友達になってやる!)

オールマイトが目の前に現れたとしてここまで興奮することがあるだろうか? いや、ない。自分の分をきっちりこなしながら、それでも彼のほうを見てしまうのはしょうがないだろう。彼が個性を発動するたびに釘付けになっている私を周りの人がどう見るかなんてその時は考えもしなかった。

「あの一!」

「ん?」

「今ちよつといいかな?」

「いいけど...?」

「私取蔭、取蔭切奈。取蔭って呼んで。」

「俺?俺は暴竜君氏。暴竜って呼んでくれ。」

放課後駅に歩いていく彼に声をかける。切れ長の瞳に赤い髪という一見怖そうな見た目の彼だが、その実人当たりは良さそうだ。

「アンタの個性って…。」

『『恐竜』だぜ?』

「やっぱり!」

その反応は久々だな!と言って笑う彼に釣られるようにこちらも笑顔になる。彼曰く小学校辺りまではクラスの人気者だったらしい。

「なんていう種類なの?」

「ガチゴラスって言うんだ。」

「聞いたことない…!まさか論文も書かれてない新種?」

目を輝かせた私に対して、彼は困ったように頬を掻いた。

「いやー?その話をするならちよつと俺の前世について話さないとな。」

「前世?」

「おう。前世。信じてくれるか?」

「聞いてから決める。」

彼はそっかそっかと笑って語りだした。

「俺の前世では化石化した生き物の一部を復元させることに成功してたんだよ。その復元された生物の一つがこいつ、ガチゴラスだ。こつちの世界でいうところのティラノサウルスの位置に君臨していたそうだな。だから新種というよりバージョン違いって言った方が正しい。」

「へえー。道理で強いわけだ。」

「いや、こいつの強さ…太古に君臨してたガチゴラスの強さってわけじゃないぜ?」

「そうなの?」

「おう。化石から見つかってる諸々の証拠から推計したガチゴラスより明らかに弱くなってるそうなんだ。」

「あれで?」

「あれで。」

そういう意味では復元は失敗してるんだ。ボールを撫でながらそ

う言う彼の顔はどこか物悲しそうだった。

「そもそも一個体の生物として死を迎えて化石になった後で、自分の生きていた時代のはるか後になって生き返らせる。それだけならまだしも生前の力を振るえない。こいつが不幸だという人が居ても俺は否定できない。」

「……………」

「でも俺は違うと思う。幸せかどうかは他人が勝手に自分の尺度で測るものじゃない。そいつがどう感じるかだ。…まあこいつは『自分の幸せとはいったい何なのか?』って哲学できるほど頭がよろしくないんだが。」

茶化すようにそう言った彼だが、帰ってきたのが私の沈黙だったためか少し困ったように咳払いする。

「…でもこいつにも夢がある。」

「夢?」

「ああ。俺たち二人の夢。この超人社会で誰もが一度は思い浮かべるような夢だ。」

「NO. 1ヒーローになる。」

そう話す彼の目の奥に、かの暴君竜の輝きが見えた気がした。

「俺とこいつがまだまだガキだった頃に、テレビにオールマイトが映ってたな。それ以来こいつが体を鍛えるようなことやり始めたから聞いたんだ。『ああなりたいか』って。そうしたらこいつは返事するみたいに鳴いてくれてさ。それ以来二人の夢なんだ。」

「だから俺は、こいつと一緒にヒーローの頂点^トになる。」

そう言つて笑う彼にこらえきれなくなつて笑つてしまった。途端に恥ずかしくなったのか真っ赤になつて頬を掻く彼にゴメンゴメンと謝る。

「だつて同じだからさ私も。」

「お?てことは—」

「ライバル。」

「登校初日からライバルができるだなんて、流石天下の雄英高校だな。」

「ありがたい話だよまったく。」

お互いに癡猛な笑みを浮かべて拳をぶつけ合いそのまま分かれる。ライバルの別れはそれでよかった。

(明日からよろしくな。ライバル…。)

なお翌日二人が『出会ったその日に一目ぼれした取蔭が放課後暴竜に告白しに行った』という噂を一緒に否定して回る羽目になるのはまた別の話。

ヒアリングポケモン

雄英高校に限らず、ヒーロー科の授業は何かと怪我をすることが多い。昨今のヒーローにはまず一番に戦闘力の高さが求められるためだ。怪我が多いということは、当然保健室の利用頻度も高いということだ。

「はい。終わりましたよ!」

「タブンネ!」

「ありがとうございます。」

個性の関係上保健室の常連となってしまうっている緑谷にとって見慣れた場所ではあるのだが、この人がいるときは、少し体が硬くなってしまう。

「いや〜自分でもほればれしてしまう出来栄え、完璧ですよ完璧!」

「タブンネ〜♪」

「……………あの。」

「はい?」

「本当に大丈夫なんですよね…?」

「大丈夫も何も完璧ですよ完璧!!ね!」

「タブンネ〜!!」

「ほら!!」

それのたぶんねが怖いんですけど!!そんな緑谷の叫びは保健室の空気に消えた。

「彼女を後継者にかい?」

「そのつもりだよ。」

雄英高校の校長室で向かい合う形で座っている二人。一人は雄英高校の校長根津。一人は雄英の屋台骨リカバリーガール。そんな二人が緑茶をすすりながらしているのは、リカバリーガールの後継者についての話だ。

「しかし君からそんな話をされるとはね。」

「オールマイトが後継を育ててるのを見て、私もそろそろと思っただけさね。」

ワンフォーオールの後継者。すなわち次の平和の象徴の育成。そんなものを掲げて今頑張っているオールマイトを見て、自分も次を意識した。それだけの話だとリカバリーガールは笑う。

『この子が居れば完璧に治せますよ完璧に!!ヒーリングに関してこの子を超えられるのなんていらないと言っても過言ではありませんからね!!』

雄英に入ったばかりの頃の彼女がそう笑って言っていたのが、不意に頭をよぎる。保健室に入り浸っては私から治療のいろはについて聞いていた彼女は、たまになら保健室を預けていくくらいには成長した。

「平和の象徴として社会に必要とされる彼のように、雄英の屋台骨も次世代に引き継がれるべき存在。君が認めるなら僕に異論はない。」

「そうかい。」

ふたりしてズズツと緑茶をすすする。

「がしかし、まだまだ本人や周囲の人間に話すのは駄目だね。私の後継を名乗るならもっと頑張ってもらわないと。」

「厳しいねえ。」

「当たり前を求めているだけだよ。いついかなる患者が来ても、その人にあつた適切な治療を施してやるっていう当たり前をね。さて――」

もうそろそろ預けていた保健室を返してもらおうかね。そう言つて席を立ったりカバリーガールを見送った根津は、思いにふける。

(次世代か…。)

学校は次の世界を育んでいく場所だ。何も彼らだけの話ではない。

「…君たちが作るのは、果たしてどんな世界だろうか。」

今この学校にいる次の世代の者たちが作る世界に思いを馳せながら、根津はおかわりした緑茶を啜った。

ゆきぐくにポケモン

僕が―緑谷出久が彼女と出会ったのは、近所では珍しく深く雪が積もった日だった。無個性だから、そんな理由で始まったいじめは幼い僕の心に深く突き刺さった。これまで仲良くしていたはずの皆が僕を嗤う。そのことが悔しくて、でも自分ではどうしようもなく、皆と会うのがとても怖くなった僕が、まだ雪が降り続く中一人ぼっちで遊びに行った公園に彼女はいた。

「…?…こんにちは。」

「…こんにちは。」

「めのー!」

一目で普通じゃない人だと思った。雪のような真っ白な髪に紫色の瞳、脇には見たことのないいきものを連れていた。球体の頭から垂れる触れる振袖のような腕に、帯をまいたように見える体。少なくとも僕は見たことなかった。そして何より、雪が積もってしまうぐらいの寒さなのに彼女は夏に着るような白い和服を着ていたからだ。

「何してるの?」

「待ってる。」

「何を?」

「内緒。」

でもその時の僕には関係なかった。馬鹿にしてくる皆とは違う、それだけで僕にはいい人だったから。

「僕は緑谷出久。君は?」

「…私はユキ。この子はメノコ。」

「めのー!」

「よろしくね!」

「…よろしく。」

それから僕たちは話した。

「めのー!」

「この子、出久のこと気に入ったみたい。」

「そうなの?」

「めのおく！」

「ほらね？」

「そっか。」

「メノコはユキの個性なの？」

「うん。いつもはこの手のボールの中に入っている。ね？」

「めの！」

「そっか…。」

「…？どうかしたの？」

「僕、無個性だから、その…。」

「そっか…。」

「ユキはその格好で寒くないの？」

「うん。」

「すごいね。僕こんなに着込んでるのに寒いのに。それも個性なの？」

「内緒。」

「また？」

「また。」

「僕ヒーローになれるかな？」

「出久はヒーローになりたいの？」

「うん！」

「うーん。どうだろうね？」

「ユキもなれないと思うの？」

「未来がどうなるかなんて簡単にはわからないよ。…メノコはどう思う？」

「めの…。」

「微妙だっつて。」

「えー…。」

和気あいあいとした雰囲気とはいいいがたかったけど、でも僕にとってはいい話し相手だった。でもそんな時間にも終わりは来る。

「ごめん、お迎えが来ちゃったみたい。」

彼女は突然そう言った。僕は周りを見渡してみたけど迎えはおろ

か人なんか見当たらなかった。そんな僕を見て彼女は言った。

「出久には見えないよ。でも私たちにははつきり見えてる。だからもう行かなきゃ…。ごめんね？」

「そんな…。」

ほんのわずかな時間の交流だった。それでも僕にとって彼女は大切な人になっていった。だから僕は聞いたんだ。

「また会える？」

彼女は困ったような顔をした後言った。

「また、今日みたいに雪が積もった日なら会えるかもしれないし、会えないかもしれない。」

「また会いたいって思うくらい私たちのことを好きになってくれたのは、すごく嬉しい。私もメノコも楽しかった。だから――」

――忘れないでほしいな。私たちのことを。

この時の彼女の目はとても綺麗で、僕は一生忘れることはないだろうくらいで、だからそう答えた。

「僕、約束する。絶対に今日のこと忘れない！」

彼女たちが僕の返事に満足したように笑うと同時に、冷たい風が雪を乗せてやってきて、思わず目をつぶってしまった。目を開けたときには彼女の足跡も何も残ってない、真っ白な雪が残っているだけで、僕は切なくなつて泣いてしまった。

その日以来、雪が積もったら僕は公園に足を運ぶ。彼女たちと再開することはなかった。それでも約束を果たすために、彼女との思い出を忘れないために、僕は辺り一面真っ白になった公園に行く。